

上映映画解説

1954, 12 ~ 1955, 1

国立近代美術館 フィルム・ライブラリー



No. 31

人生案内

『人生案内』鑑賞会について

フィルム・ライブラリーでは、その事業の一部として、歴史的な価値のある芸術性豊かな映画を鑑賞し研究する会を開いて、現在までに日本をはじめ、ドイツ、フランス、イタリアのサイレント映画の古典的な作品を上映して来ましたが、今回は特別鑑賞会第一二回として、ソヴェト最初のトーキー作品「人生案内」をとり上げました。

「人生案内」は、一九三一年五月一六日にソヴェト連邦で「最初の全発声長篇芸術映画」として封切され、約一〇か月というロング・ランの新記録を作った作品です。わが国では、一九三二（昭和七）年四月二七日、東京丸の内帝国劇場（扶桑商事輸入）で初公開され、当時の映画界に大きな感銘を与えました。

人生案内 一〇巻

A Safe Guidance into Life

メジラプボムフィルム社一九三一年作品

製作 ロト・フロント音画工場

録音 「ターゲフォン」に拠る

監督 ニコライ・エック

撮影 ヴェ・プロニン

録音技師 イエ・ネステロフ

装置 イ・ステパノフ

作曲 ヤコヴ・ストルリヤル

勤労歌テキスト エン・アドウニフ

主な配役

コムウナ指導者セルゲイ・エフ・ニコライ・バタロフ
寄生虫フオムカ……………ミハイル・ジャロフ
その情婦レリカ……………マリヤ・ゴンドムスターフ
ムスターフ……………イワン・ケイルラ
コリカ……………ミハイル・ジャゴフアロフ
コリカの父……………ウラジミール・ウエスノフスキ
コリカの母……………レギナ・イヌシケキチ

ワシカ……………アレクサンドル・ノヴィコフ
特別児童検査官スクリヤーピナ……………
マリヤ・アントロポワ

その内容

ソヴェト連邦には浮浪青少年があつてはならぬ。彼等をして青春激刺たる且つ幸福なる市民たらしむべし（レーニン）といふ主題を基にして作られたソ連邦最初の全発声芸術映画である。監督、脚色にあつたエン・エック、撮影を受持ったヴェ・プロニンは五年前共にモスクワ国立映画専門学校を第二卒業生として出た新人で、作曲家ヤ・ストルリヤルは革命劇場の有力な指揮者。モスクワ第一芸術座の名優でプロダクションの「母」にも出演したニコライ・バタロフが主演し（中略）ターゲル式装置のターゲフォンにより録音撮影されてゐる。

以上はキネマ旬報第四三二（一九三二年四月二日）号の紹介文の一節です。

その物語

この映画輸入当時の検閲台本から、梗概を紹介しよう。

一九三三年。都市の文閥。駅の建物のかげに屯してゐる垢面破衣の少年の群、その眼はお上りさんの持物をかすめとるために光る。彼等は帝政時代の遺産、ヘスプリゾールヌイ（浮浪者）と呼ばれ、オベツドリョンヌイ（かつばらい）と呼ばれる。彼等の仕事を食物に生きて居る寄生虫がある。寄生虫フオムカとその情婦レリカの仕事から物語が始まる。少年コリカには父もあり母もある。だが雪の朝母は街頭で浮浪少年群に襲はれて倒れ、まだ起ち得ぬ。悲しみは残された。父を酔ひどれにし、コリカはわが家を迷い出て浮浪の群に入らねばならぬ。浮浪群は次第にその数を増し、夜となく昼となく街の危険が絶えぬ。

浮浪群を救ひ、正業に就かせるために政府直轄の「勤労コムウナ」がある。コムウナでは各自がそれぞれに適する仕事を選び、寝食苦楽が俱にされる。けれど成績は上らない。勤労を厭い、組織を嫌ふルンベンの心が幾回となく彼等を脱走させる。コムウナの直接指導者セルゲイ・エフは破天荒な「自由勤労」の方法を考へ出す。さしう頑強だった浮浪少年ムスターフはワシカも最早脱走しない。新しい建設を目指して、彼等大勢を乗せた列車が都を後にする。

停車場から二〇キロの田舎、嘗て宗教の殿堂が、今の勤労コムウナ工場だ。靴、大工、指物、機械、工具類の製作に一同が愉快に働き始める。春、川の氷が溶け、野の雪が融ける。春は彼等ルンベンの心呼び醒す。その心を捉えるために、再び女を抱えた寄生虫がこの地にやつて来る。セルゲイ・エフは彼等を野に放つ事を考へる。鉄道敷設の工事が進行と共に、寄生虫の張る網も拡がる。ワシカが先づ寄生虫の網に引掛り、続いて多くの同僚が「酒と煙と女」とを擁するこの甘い巣を訪れる。建設の仕事の規律は次第に乱れて来る。終に、ムスターフはコリカと相闘り正義の仲間と共に、一夜この巣を襲ひ、敵の一隊を捕縛する。ただフオムカが暗に乘じて逃れ去る。

駅から勤労コムウナ工場までの鉄道は終に完成した。明日の開通式の準備のために時間が掛り、ムスターフが帰る時には既に夜となつた。一人、自分達の結晶たる鉄路の上をトロッコで走らせながら、ムスターフの口を衝いて出る愉快な歌は、彼の遠い故郷の民謡だ。突如、彼のトロッコは鉄路から抛り出される。それは寄生虫フオムカが復讐のために鉄道を破壊したからだ。フオムカとムスターフとは暗夜に相対した。フオムカの手に短剣が光る。烈しい格闘の後やがて——悲鳴。

夜は静かに明け放れる。欲喜をいつばいに乗せた最初の列車が、今駅から勤労コムウナ工場に向はうとする。最初の「車掌」になつたコリカの喜び。暫らく逢はなかつた父親にもめぐりあふ。彼の口から出発の呼子の笛、だが最初の「機関士」たるムスターフは何処に居る？列車は欲喜を乗せて疾走する。急停車、線路に横る死骸、血潮に染んだ短剣によつて、ムスターフが敵フオムカのために斃されたことが分る。涙

が皆の頬を伝ふ。

勤労コムウナ駅ではセルゲエフを始めとして数百の人々が最初の列車の到着を待つて居る。列車は終に来た。だが機関車の先頭に横つてテープを切つたのは、ムスターファの亡骸だつた。みんなの頭から帽子が除かれた。悲しい汽笛が鳴る。セルゲエフは涙のうちに言ふ。——どうしたムスターファ、あんなに機関士になり度がつてたのになア……。

その反響

当時の映画界を考えますと、一九三一(昭和六)年には、ジオセフ・フオン・スタンバーグの「モロッコ」[闇謀X二七]、ルネ・クレールの「巴里の屋根の下」[ルミリオソ]などが公開され、邦画でも日本における最初の本格的トーキーといわれる、五所平之助監督の「マダムと女房」が松竹蒲田で生れ、トーキー映画の芸術的な価値が漸く認識されるようになりました。

「人生案内」の封切された一九三二(昭和七)年には、この映画に続いて五月五日から同じ帝国劇場で、クレールのトーキー第三作「自由を我等に」が公開されています。このように、あいついで封切されたトーキー初期の二大傑作、「人生案内」の内容と新鮮な形式、「自由を我等に」におけるクレールの軽妙な技法とオーリックの音楽効果が、当時の映画界特に若い世代に大きな衝撃を与えたことは、容易に理解されます。(キネマ旬報ベスト・テンでは「自由を我等に」について第二位)当時のキネマ旬報は数号にわたつて、批評はもちろん読者論壇をあげてこの二作品に集中しています。

それらの代表的論評の一部を紹介してみましよう。北川冬彦氏はキネマ旬報第四三四(一九三二年五月一日)号に次のように述べています。

——ソヴェト同盟の音画「人生案内」を見て、僕は驚いた。これが、ソヴェト同盟最初の音画芸術作品だといふのだから、突撃すこいものだ。恐らく、これ以外にも、このような優れた作品があるだらうと想像され大へん楽しい思ひにひたる事が出来た。よく、人々

は、何かいゝ作品が現はれると、人生といふものが楽しくなつた。といったことをいふが、そして、さういふ言葉を聞いて、何かテレクサイ思ひをする僕ではあつたが、この映画を見た時は、臆面もなくその言葉を出さずに居られなかつた。(中略)さて「人生案内」のどこが、そんなら、そんなにいゝのかといふと、僕は困つて了ふ。トーキーに対する知識の浅い僕には、たゞ「独断」を洩らすに過ぎないのだが、ともかく何よりも感じたことは、これこそ真の音画だといふ感想だ。いま、でのどんなすぐれた評判のトーキー映画にしろ、多かれ少なかれ舞台的臭味を帯びてゐないものはなかつたと僕には思へるのだ。トーキーの劃期的な足跡をのこしたといはれるスタンバーグの「モロッコ」さへ、この「人生案内」を見てからは、それがどことなく舞台劇臭味を帯びてゐるのを感じるのだ。またトーキーの世界におけるもう一つの星とされてゐる、ルネ・クレールはどうかといふと、これ又その臭気を感じるばかりでなく、音に対していぢけたり、また音をもて遊びすぎてゐる感があるのであるが、「人生案内」に於いては、音が映画全体の中で、その独自の役目を、遠慮しすぎていぢけたり又、へんに出しやばつたりせず守つてゐるのだ。(後略)——

又、飯田心美氏は同誌第四二六(一九三二年五月二一日)号に、

——(前略)羨の感じたのは第一に、これがアメリカ映画では到底及ばないトーキー領域を開拓してゐること、第二にエロライ・エックの演出ぶりが公式主義の弊から極力避けやうとしてゐること、第三に主題をつたへる点に於て実に判り易く要領を得てゐること、大体この三つである。(後略)——として激賞しています。

(引用文の仮名使いは原文のまま)